
巻頭言



人間看護学部 学部長

あま さ きょう こ
甘 佐 京 子

日本語は、他の国の言語と比較すると、語彙数が圧倒的に多いといわれている。確かに英語で自分を示す言葉は「I」であるが、日本語では「わたし」「僕」「わたくし」「俺」「あたし」など複数あるうえに、おかれた状況により、その表現が変化することもある。このように様々な言葉があふれているこの国の2017年の流行語大賞に選出された言葉の一つに「忖度」がある。この言葉は、2017年度を賑わせたニュースの中で、再三取り扱われたものであるが、それを通してこの言葉を知った若者も少なくないはずである。「忖度」とは、「他人の心をおしはかって、相手に配慮すること（小学館大辞泉より）」とある。看護実践の様々な場面において、対象の思いをおしはかることは大切なことと認識されている。しかし、おしはかるというのは推し量ることであり、すなわち推測に過ぎない。「この状況ではAさんは不安に違いない」「今回のことで家族はつらい思いをされているかもしれない」と、対象の思いを推し量ることは必要であるが、看護が実践の科学である以上、それが真実か否かを確認したうえで、私たちは介入しなければならない。真実を見極めるために、直接対象に確認することはもちろんであるが、看護研究をもって自分の推測を確認することも一つの手段である。たまたま「忖度」したことが真実である場合もあるかもしれない。しかし、看護を学問として体系化していくためには「忖度」ができる看護師ではなく「真実を探求できる」看護師であるべきであろう。今回投稿された論文が抽出した真実は決して大仰なものではないかもしれないが、意味のない「忖度」よりも、その価値は十分大きいはずである。